

埼玉縣森林意見

全

産

96

065217-000-2

産 - 96

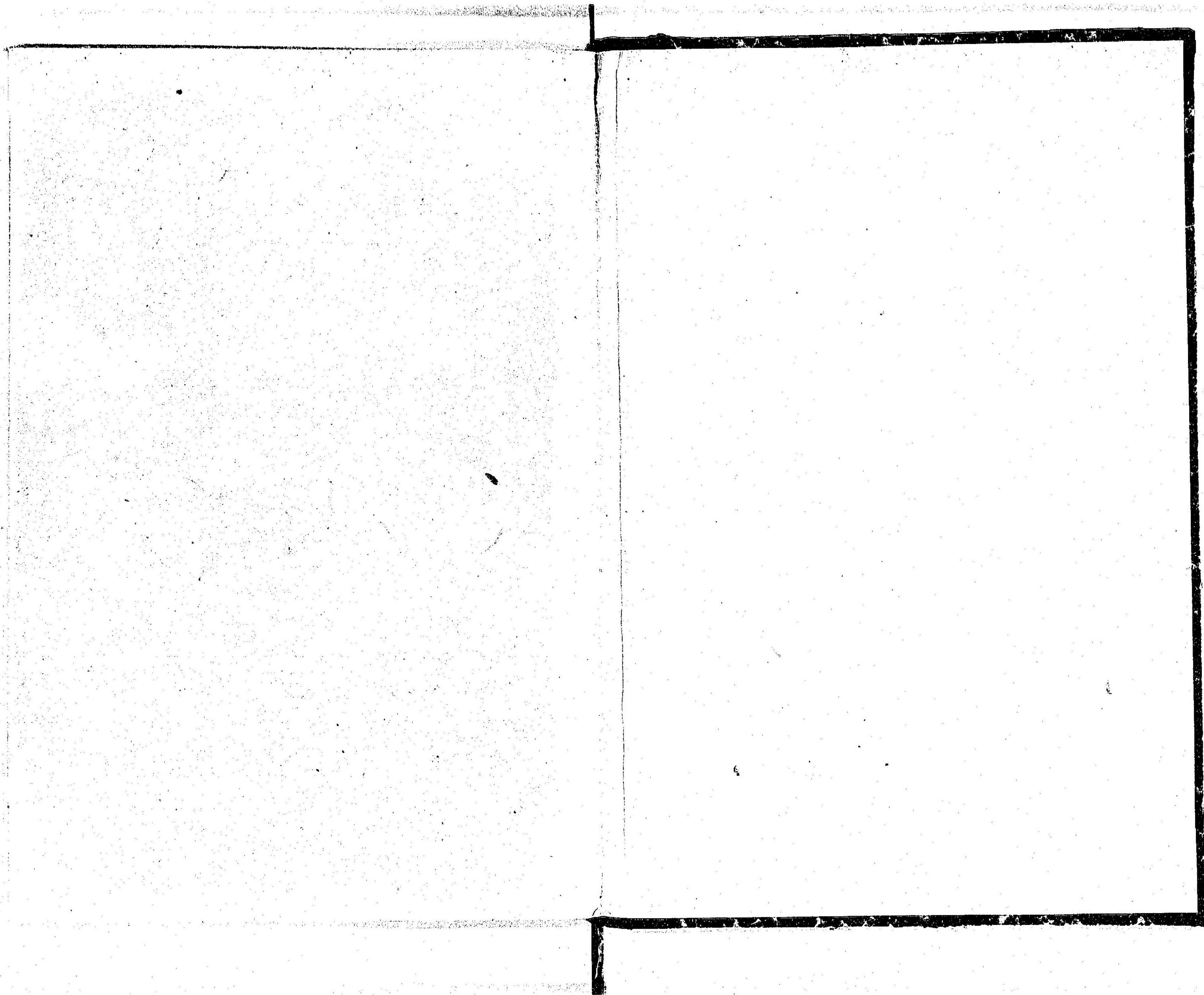
埼玉縣森林意見

白杵 永次郎 / 著

M27.3

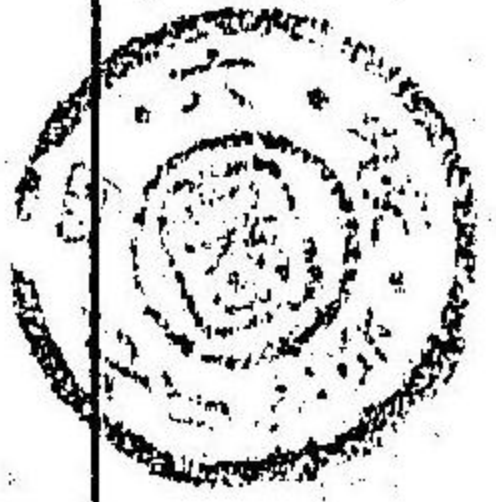
CCE-0043





96

埼玉縣森林意見



敬言

本書ハ本縣ニ於テ明治二十六年四月東京大林区署技師林學士
 白井永次郎ハ秩父、兒玉、比企、入間、榛澤ノ五郡ヲ巡回シ實地森林
 ヲ踏査スルコトヲ托セリ後同氏ヨリ左ノ意見ヲ寄セラレタル
 ニ依リ當業者ヲシテ目下林業改良ノ必要ナルヲ知悉セシメン
 カ爲メ之ヲ頒布ス

明治二十七年三月

埼玉縣内務部

埼玉縣森林意見

埼玉縣ノ林政中最モ注意スヘキハ水源涵養ナリトス埼玉縣ニ於テハ利根川ヲ除クノ外神流川及ヒ荒川ナリトス其中荒川ノ如キハ埼玉縣半部以上ノ水田灌溉ノ基源トナリ又々埼玉縣並ニ東京ノ運輸ノ便利トナリテ數十萬町水田ノ豊否幾萬貨物ノ運輸ノ便否之ニ是レ由ル故ニ此ノ一川ノ水源涵養豈ニ忽ニスヘケンヤ苟モ此ノ一川ノ水源枯涸セハ數十萬町水田灌溉ノ利幾萬貨物ノ運輸ノ便ヲ失フノミナラス土木工事ハ益々其費ヲ増加スルニ至ル今荒川水源ノ有續ヲ見ルニ大ニ憂フヘキモノアリ
荒川水源ノ各川中名栗村ヨリ流出スルモノハ河中砂礫少ク多クハ小砂ヲ以テ瀬ヲナスモ他ノ各川ハ皆砂礫堆積シテ瀬ヲナスモノ多シ是レ水源荒敗ノ兆候ナリトス
余ハ已ニ各所ニ於テ河中ニ砂礫ノ堆積スルヲ見水源ノ荒敗セルハ信シテ疑ハサルモ奈何セン先般埼玉縣ノ巡回中講話ニ其日子ヲ費ヤスコト多ク實地ニ山川ヲ跋渉スルコト少キヲ以テ何川ノ荒敗ハ

何山濫伐ノ結果ナリト斷言スルコト能ハス然レモ余ノ推測ヲ以テスレハ秩父郡大宮町近傍ニ砂礫ノ堆積スルハ浦山村大瀧村等各地非常ノ濫伐ニ歸セサルヲ得ヌ又々都幾川ノ砂礫堆積ハ大柵村ノ濫伐ニ歸セサルヘカラス其他各川ニ就キ其ノ水源ヲ檢セハ到ル所ニ其濫伐ヲ見ルヘシ殊ニ熊谷町近傍ノ荒川河中ニハ砂礫堆積甚ダシク平常ニアリテハ河中殆ント水脈ヲ絶チ河水ノ一部ハ彼ノ有名ナル熊谷堤ノ下ヲ潛行シテ綾瀨川ノ水源トナレリ又々一部ノ水ハ砂礫中ヲ潛行シテ砂礫ナキ河中ニ流出ス此ノ砂礫ノ堆積ハ秩父郡諸山濫伐ノ致ス所ニシテ熊谷町ヨリ上流ハ河中ノ傾斜稍急ナルモ熊谷町ニ至リ傾斜緩ニシテ水流モ亦タ緩ニナレリ且ツ熊谷ニ一ノ屈曲アルヲ以テ轉々シ來リタル砂礫モ此處ニ堆積スルモノナリ此ノ堆積ノ爲メニ滯滯シタル水流ハ乃チ堤下潛行トナルナリ(余ガ實測セシキハ平水ニシテ熊谷町南ノ出切ニアル石橋下ノ水面ト熊谷町松山町間ノ荒川ニ架シタル橋下ノ水面トハ正ニ一丈二尺ノ差アリ故ニ荒川ノ水ハ熊谷町ノ河ニ潛出ス其潛出スルヤ汚物ヲ除去シ實

ニ美麗ナリトス綾瀬川ノ水ノ茶家ニ賞玩セラレハ蓋シ此ノ瀟過
 ニ源因ス蓋シ此ノ潛行ハ熊谷堤崩壞ノ基トナラサレハ幸ナルモ恐
 ラクハ此ノ崩壞ヲ免レサルヘシ獨リ名栗村ヨリ發スル水源ハ其上
 流ノ民林甚タ整理シタルヲ以テ砂礫ヲ流出セスシテ細砂ノミヲ流
 出シ所謂源泉滾々トシテ來ルモノナリ
 以上ノ現状ハ水源涵養ノ如何ニ歸スルモノニシテ其源因ヲ説明ス
 ル爲メニ林學ノ推理ヲ以下ニ掲カク(林學士鈴木審三氏著林業篇ニ
 アリ)

一 温度ノ關係

温度ニ就テ森林ノ氣候ニ及ホス最モ必要ナル關係ハ寒暖ノ差緩和
 ナルノ一事ニシテ晝間森林内部ヲ徘徊スレハ冷氣ヲ感シ夜間ニ於
 テ温度ヲ覺エ夏時林中ニ來レハ涼ヲ覺エ冬季ニ於テハ暖氣ヲ感ス
 ル等實驗上吾人ノ熟知スル所ナリ然レモ我國氣象學ノ發達未タ充
 分ナラスシテ測候上ノ設ケ少キト林學ノ進歩日尙ホ淺クシテ世人
 注意ノ度少キトニヨリ各種森林ニ就テ測候セシモノナキニヨリ何

レノ森林ハ外野ニ比シ幾何ノ温度ノ差違アルヤ知ルヘカラスト雖
 凡獨乙國ノ實驗ニ依テ視レハ猛夏三伏ノ候ニ於テ外野ト温度ノ差

山毛櫸林ニ在テハ 四度五十六分低

唐檜林ニ在テハ 二度五十六分低

松林ニ在テハ 二度三十分低

ニシテ嚴寒凍氷ノ節ニ於テハ

山毛櫸林ニ在テハ 一度五十八分高

唐檜林ニ在テハ 二度三十八分高

松林ニ在テハ 一度十八分高

山毛櫸林ニ在テハ夏時樹葉繁茂スルモ冬季ニ至レハ盡ク散落シテ
 亦一葉ヲモ止メサルニヨリ夏時ニ於テハ能ク日光ヲ蔽遮シ水氣ノ
 蒸發ヲ遲緩ナラシムルニヨリ外部曠野ノ温度ニ比スレハ其差極メ
 テ大ナルモ冬季ニ在テハ僅ニ枝幹ニヨリ温度ヲ保持スルノミナル
 ニヨリ外部曠野トノ温度ノ差尤モ小ナリ之ニ反シテ唐檜林及ヒ松
 林ノ如キニ在テハ四時常綠ノ針葉ヲ具ヘ夏時ニ於ケルモ冬季ニ於

ケルモ敢テ其状態ヲ異ニセサルヲ以テ温度ノ差モ亦濶葉山毛櫸林ノ如ク大ナラサルナリ
 又エーベルマイエル氏ノ観測ニ依レハ森林内部ト外野温度ノ差ハ晝夜ニ於テ左ノ如クナルコトヲ証セリ

外野 森林 差

春	九、七七	八、五〇	一、二七
夏	一八、八八	一六、八四	二、〇四
秋	八、五八	七、八四	〇、三四
冬	二、六五	二、一八	〇、四七

(此表ハ少シク難ハシキ點ナキニアラサレト全氏千八百六十八年ヨリ全七十年迄三年間ノ實驗成績ナレハ姑ラク茲ニ掲ク)
 以上舉タル處ノ結果ニ依テ考フルキハ森林内部ニ於テハ勿論外部至近ノ地ニ在テハ温度ノ高低外部曠野ヨリ緩和ナル明ラカナリ

二 濕氣ノ關係

大氣ノ水蒸氣ヲ飽和スル多少ハ温度ノ高低ニ關スルモノニシテ温

度大ナレハ飽和力大ニ温度小ナレハ飽和力モ亦從テ小ナルモノナリ今大氣一立方メートル(曲尺三尺三寸)中ニ飽和スル水蒸氣ノ量ヲ觀ルニ大氣ノ温度攝氏十度ノ時ニ於テハ九、三、三ミリメートル(一ミリメートルハ三厘三毛)ニシテ漸次温度ノ増加スルニ從テ其量ヲ増シ二十度ニ至レハ一七、四、四ミリメートル(三十度ニ在テハ三一、六、六ミリメートル)四十度ニ在テハ五四、九、九ミリメートルニ達スト雖モ十度ヲ降ルニ從テ次第ニ其量ヲ減シ飽和シ餘ル分量ハ雨露ノ如ク點滴トナリテ地上ニ下ルモノナリ今大氣ノ温度ノ高低ニ從ヒ其飽和スル所ノ水蒸氣ノ量ヲ示セハ

大氣温度 飽和量

零下三十度	〇、四ミリメートル
全 二十五度	〇、六ミリメートル
全 二十度	〇、九ミリメートル
全 十五度	一、四ミリメートル
全 五度	二、一ミリメートル

霧度	四、六ミリメートル
五度	六、五ミリメートル
十度	九、三ミリメートル
十五度	一、二、七ミリメートル
二十度	一、七、四ミリメートル
二十五度	二、三、六ミリメートル
三十度	三、一、六ミリメートル
三十五度	四、一、八ミリメートル
四十度	五、四、九ミリメートル
四十五度	七、一、四ミリメートル

此ノ如ク空氣ノ溫度ノ高低ハ水蒸氣ノ飽和量ニ増減ヲ來スモノナルカ故ニ夏時ニ於テ外部曠野ノ空氣森林内ニ來ルルハ俄ニ溫度ヲ減少シテ飽和力ヲ殺滅スルニヨリ飽和シ餘ル處ノ水蒸氣ハ滴下スルヲ以テ夏時林中ニ入レハ冷氣ヲ感スルト全時ニ濕氣ヲ覺ユ冬季ニ在テハ反對ノ結果ヲ觀ルヘシ全理ニヨリテ森林内ノ空氣ハ晝間

濕潤シ夜間却テ乾燥スルモノナリ而シテ冬季森林内濕氣ノ量ハ外部ノ空氣ニ比スレハ二十乃至三十「プロツェント」(百分中)少シト云フ

森林ト水源ノ關係

上文陳述スル如ク森林ハ常ニ濕氣ヲ保持スル「外部曠野」ヨリ多量ナルノミナラス降雨ノ量モ亦大ニシテ平地林ニ在テハ「一、二五」プロツェント「三、千五百尺」乃至「三千尺」ノ山嶽林ニ在テハ「八十四」プロツェント「多シト」云フ此ノ如ク雨量濕氣ノ關係ニヨリ林中含水ノ量極メテ大ニシテ普通ノ土地ニ比スレハ實ニ六倍半ノ多キニ及ヘリ而シテ之カ主ナル原因ハ雨露ノ森林ニ降ルニ際シ樹葉枝間ニ停滯シテ容易ニ地被ニ達セサルト落葉蘚苔等ノ地表ヲ被包スル所ノ物質ニ吸收セラルルニ由ルモノニシテ今林中ニ降ル所ノ雨量ヲ驗スルニ其三十三「プロツェント」ハ樹幹枝葉ニ止マリ樹下ニ達スルモノハ僅カニ六十七「プロツェント」ニ過キヌ而シテ其樹下ニ達スルモノモ亦再ヒ落葉蘚苔等ニ吸收セラレ直ニ地上ヨリ流出スルモノハ幾ント皆無ノ姿ナリ或人ノ説ニヨレハ林中ニ降ル雨ハ少ナクモ十五時間

ハ停滯溜止スト云ヘリ
水分ヲ保持スルハ此ノ如ク多キニ似ス蒸發ノ分量極メテ少クシテ
常溫ノ時ニ在テ裸地ニ於ケル水量ヲ百トスレハ林地ニ在テハ六十
乃至五十五「プロツェント」ニシテ稍々其半ヲ超ヘ若シ大氣濕氣ヲ包
含スルルニ在テハ四十五「プロツェント」即チ裸地蒸散ノ半量ニ達セ
ス最モ高峻ナル山嶽林ニ於テハ降雨ノ八十七乃至八十三「プロツェ
ント」ハ林中ニ停滯シテ蒸散スル所ノ量ハ僅カニ十乃至十三「プロツ
ェント」ニ過キス而シテ此等蒸發ノ多少ハ林木ノ粗密樹林ノ體積年
齡及ヒ地表ヲ被包スルトコロノ藓苔落葉廬土ノ厚薄ニヨルモノニ
シテ壯年ノ林木ニシテ其閉鎖ノ度最モ稠密ニ造林學上「ゲドレング
ト、ゲシユロツセン」ニ「ゲドレンク」ト「ゲシロツセン」トハ樹枝相交錯シテ
稠密ナルモノヲ云フニアルモノニシテ地上ヲ被包スル藓苔落葉廬
土ノ多キハハ含水ノ量自ラ多ク蒸散ノ度極メテ少シ今重量百ノ地
衣(落葉藓苔廬土等凡テ土地ヲ被包スルモノヲ總稱シテ地衣ト稱ス)
ニ就テ含水ノ量ヲ檢スルニ

山毛櫸ノ落葉ニ於テハ 二三〇乃至三三〇「プロツェント」
藓苔ニ於テハ 二八〇乃至三三〇「プロツェント」
唐檜ノ落葉ニ於テハ 一五〇乃至一九〇「プロツェント」
松ノ落葉ニ於テハ 一四〇乃至一六〇「プロツェント」
上表ニ於テ視レハ含水ノ量ハ藓苔最モ多ク松ノ落葉最モ少シ又樹
種ニ就テ視レハ山毛櫸ノ落葉最モ多ク唐檜之ニ亞キ松ノ落葉最モ
少シ即チ樹葉面積ノ大小ト含水ノ量トハ正ニ正比例スルヲ知ルヘ
シ或人ノ實驗ニヨレハ一立方「メートル」ノ山毛櫸ノ落葉ハ二百「リッ
トル」ニ「リットル」ハ五合五勺四三五ノ水ヲ含ミ一「リットル」ノ廬土ハ
一、八「ボウ」ニ「ボウ」ハ一斤ノ水ト一、〇「ボウ」ノ土壤ヲ含ミ又
厚サ五「センチメートル」ニ「センチメートル」ハ三分三厘(廣サ一「メー
ル」平方ノ廬土ハ五十「リットル」ノ水分ヲ含有スト云フ
今「プロエツソル、ドクトル、マイエル」氏ノ藓苔ヲ以テ被ハレタル土壤
深サ五「センチメートル」ノ下ニ於テ含有スル水量試驗ノ成績ヲ視ル
ニ

重キ墾土ノ百分中含水量 每月四五回ノ試験ニ

月	二十五年生唐檜	六十年生唐檜	百二十年生唐檜	植樹セサル空地
七月	一八、四四	一九、九八	三四、八二	一六、二二
八月	一三、四九	一四、三二	二五、九五	一〇、八七
九月	一九、三五	一六、六三	二九、〇九	二一、四八
十月	二三、一〇	二〇、七五	三六、九四	二二、六七
十一月	二九、七一	二六、五七	三四、〇一	二二、八〇
十二月	三〇、六〇	三〇、七八	四八、二三	二七、四九
平均	二二、四五	二二、五〇	三四、八四	二〇、二五

以上ハ千八百八十五年ノ試験成績ニシテ超ヘテ千八百八十六年ノ結果ヲ觀ルニ

一月	三七、一一	二八、八三	四三、七七	二四、六二
二月	四一、八四	三二、九〇	三七、八四	二四、〇六
三月	四五、五六	四八、四四	三六、三〇	三〇、五九
四月	三三、一七	四八、四三	五四、二〇	二四、七〇

五月 二九、六〇 四九、一九 二一、四四
 六月 三六、五九 五二、七六 二一、一三
 平均 三九、四二 三七、四六 四五、八一 二四、四二
 二年間 三〇、九三 二九、四八 四〇、三二 二二、三三

以上ニ表ノ平均含水量ニ依テ觀ルニ伐期ニ違シタルモノハ其量最モ多ク外野ノ空地ニ於テハ最モ少ナシ之レ地衣ノ厚薄ニヨルノ確證ニシテ樹木老年ニ及フニ從ヒ落葉藓苔ヨリナルトコロノ墾土ノ量從テ多キニヨルナリ(前表ニ於テ幼木林ノ含水量壯木林ヨリ大ナルハ五、六二月ノ成績ヲ得サレハナリ若シ五、六二月ノ成績ヲ得レハ幼木林ヨリ壯木林ト漸次含水量ヲ増加スルヤ必セリ)

斯クノ如ク森林ハ水分ヲ含有スル力大ナルニヨリ苟モ此ニ來ル所ノ霜雪霰雹等水分ヲ含有スル所ノモノハ盡ク泉源ノ素ヲ獲フカ故ニ水流混々トシテ盈進シ大旱三伏ノ日ト雖モ能ク河水ヲ保持シ水利ヲ助クルモノナリ

森林ト土砂評止ノ關係

地質學上ニ於テ知ル如ク凡テ岩石ハ風雨霜露ニ曝露スルコト久シ
キニ瀰ルルハ如何ニ堅牢ナル性質ノモノト雖モ自ラ粉砕シテ土壤
トナリ漸次凝聚力及ヒ粘着力ヲ失フテ輕鬆トナリ平地ニ在テモ尙
ホ能微風少雨ノタメニ飛散流出スルカ故ニ丘陵山嶽等ノ如ク傾斜
ヲ有スル地ニ在テハ或ハ他カヲ藉ラスシテ自己ノ重力ノミチ以テ
自然ニ崩壊シテ山下ノ田畑ヲ埋瘞スルヲアリ依テ此等ノ土地ニシ
テ若シ地上樹木及ヒ地衣ノ如キ被包物ナクシテ山骨兀出シ土壤自
由ニ風雨ヲ受クルハ時ニ或ハ大石ヲモ墜落セシメテ或ハ洪水ノ
源ヲナシ或ハ山嶽ノ因ト作リ不測ノ災害ヲ生スルハ間々見聞スル
所ナリ大和ニ紀伊ニ美濃ニ比年慘毒ヲ逞フシ現時ノ狀況ヲ以テ將
來ヲ考フルニ幾ント底止スル期ナキカ如シ而シテ此等洪水ノ源因
タル未タ充分ノ調査ヲ遂ケサルカ故ニ或ハ他ニ源因ノ存スルヤ知
ルヘカラスト雖モ特ニ數年來其災害ヲ逞クスルヲ以テ視レハ維新
已降林政廢弛斧斤自由ニ山林ニ出入シ濫伐ノ餘波援テ此ニ至ルヤ
知ルヘカラスト昨夏八月美濃具上郡ニ生セシ洪水ノ如キハ至ク山林

濫伐ニヨリ山嶽崩壊シタルニ基因シタルモノ、如シ今林學士齋藤
音作氏ノ實地調査ノ有様ヲ聞クニ具上郡ハ四境山嶽ヲ以テ圍マレ
タル恰モ漏斗ノ底部ニアルカ如キ地ニシテ山嶽ノ主成分ハ石英ニ
シテ中ニ石灰石ヲ混シ傾斜緩和ナラスシテ幾ント直角ヲ以テ交ハ
リタル粘土板石ノ脈ヲ以テ斜面ヲ横斷セラル、ニヨリ地上樹木生
育スルハ何等ノ損害ヲ生セサルモ目下ノ狀態ハ濫伐ノタメ地上
幾ント樹木ヲ存セス純乎タル赭山ニシテ土壤ハ自己ノ重力作用ヲ
以テ自然ニ崩壊スル傾ヲ有スルニヨリ風雨ノ來襲スル毎ニ墜落ス
ルハ勿論地上ヲ流ル、トコロノ水ノタメ土性中ノ石灰石ハ漸次溶
解シテ罅隙ヲ生シ時日ヲ經ルニ從ヒ増大シテ寒暑ノタメ岩石ノ膨
縮ヲ來シ其極遂ニ粘着力ヲ失フテ軟脆トナリタルヲ以テ之ニ滯留
シタル所ノ水壓ノタメ破裂シテ土砂ト共ニ濁水ヲ氾濫シ不測ノ災
害ヲ來セシナリト
以上掲載スルガ如ク森林繁茂スルハ氣候寒冷ニシテ雲ヲ生シ雨
ヲ降タシ易ク且ツ濕氣ヲ含有シテ慢リニ一時暴出スルコト少ク八

十六
時間ニ暴出スル水モ數十日間ニ流出シテ平常ハ河水多ク降雨ノ際ハ洪水ノ量少ク實ニ水源ノ涵養トナリ且ツ土砂扞止ノ功ヲ奏シ森林ノ本分ヲ盡スモ森林繁茂セス兀山裸谷相連亘スルニ至リテハ巽ヲ起シ雨ヲ降スヲ少ク一旦豪雨ニ逢ヘハ雨量一齊ニ流出シテ僅々八九時間ニ降雨ノ全量ヲ流出シ堤ヲ破リ岸ヲ崩シ其害實ニ甚クシキモ其天露雨歇ムニ當リテハ水源ノ貯蓄ナキヲ以テ流水忽チ枯涸シテ遂ニ灌溉ノ利ヲ失フニ至ル殊ニ洪水一時ニ流出スルハ其速力非常ニ迅速ニシテ能ク巨大ノ岩石ヲ轉流シテ餘サス况ンヤ等大ノ砂礫ノ如キハ流出尤モ容易ナリトス故ニ河中砂礫ヲ見ルニ至ル之ニ加フルニ山岳ノ崩壊モ亦甚ク其破壊シタル岩石ハ洪水毎ニ下流ニ堆積スルニ至ル(時トシテ桑田ヨリ高ク川身ノ横フアリ秩父郡中川村ニ其證據アリ)是レ前陳ノ如ク森林荒敗ヨリ河流ノ荒敗ヲ來タセシ源因ナリ
今埼玉縣ノ森林ヲ通觀スルニ其荒敗シタルモノハ大柵村近傍浦山村大瀧村ノ近傍及ヒ兒玉郡ノ各村尤モ甚クシトス兒玉町ハ粗朶村

ノ伐採ニ林力以上ノ伐採ヲナシタルニ歸シ大柵村近傍ノ荒敗ハ製炭等ノ爲メニ伐採ノ甚クシキニ依ル(炭價暴騰ヨリ)浦山村近傍ハ是レ迄製炭ノ利益少キヲ以テ久シク斧斤ノ入ルナク皆萌芽力ヲ失フタル老大ノ樹木鬱蒼タリシモ此頃道路開ケ運輸非常ニ便利トナリ且詳馬場玉雨縣製茶ノ業隆盛ナルヨリ木炭ノ需用大ニ増加セシト世間一般ニ木炭材料欠乏ニ傾キタル爲メニ一時ニ大面積ノ森林ヲ伐採スルヲ以テ自ラ荒敗ニ傾カサルヲ得ヌ其伐採シタル跡ハ縱令其樹木ノ根株ハ存在スルモ奈何セン老大ノ樹ニシテ萌芽力乏シク再ヒ森林トナルハ長年月ヲ要スヘシ其間ニハ種々ノ林害起リ遂ニ兀山裸谷相連亘スルニ至ルヘシ若シ今日ノ如キ勢ヲ以テ進ムトハ秩父郡十萬餘町(實測セハ十數萬町トナル見積)ノ森林ハ全ク荒敗シテ遂ニ荒川ノ水源ヲ枯涸シ本邦第一ノ運輸ノ便アル墨田川モ遂ニ淺瀬ヲ見ルニ至ルヘシ今ニシテ救済セズンハ遂ニ如何トモナスヲ能ハサルヘシ
之ヲ救済スルニ秩父郡ノ人民ヲシテ森林愛育ノ念ヲ起サシメサル

ヘカラス秩父郡一般ノ森林ニ對スル人民ノ感情ヲ見ルニ甚ダシキ
 ハ森林樹木ヲ無尽藏視シテ之ヲ取ルモ尽クルナシト思フモノアツ
 此等ヲシテ森林ノ功用ヲ知ラシメ其林力如何ヲ知ラシメ且ツ一般
 ノ森林取扱ヲ知ラシメサルヘカラス然ルモ其森林ヲ繁茂セシム
 ル容易ナリトス然ルニ埼玉縣各郡ノ森林繁茂ヲ謀ル元ト森林地ノ
 ミ其惠澤ヲ蒙ルモノニアラス尙モ水田ノ灌溉ヲ荒川ニ依ルモノハ
 皆其惠澤ヲ蒙ルヲ以テ埼玉縣全体ノ力ヲ以テ森林繁殖ヲ獎勵セサ
 ルヘカラス(東京府ノ一部モ幾分カ費用ヲ負擔スヘキ理由アリ)

森林繁茂ヲ獎勵スルニハ左ノ如シ

第一 縣費ヲ以テ秩父郡ニ一大苗圃ヲ設ケ杉檜等ノ苗木ヲ百本六
 七錢位ノ相場ナラシメサルヘカラス(内秩父ニ苗木ヲ仕立テ販賣
 スルモノナシ故ニ百本貳拾錢以上ニシテ杉檜ヲ植栽スルモノ少
 ク且ツ植栽スル人アルモ甚ダ粗立ナリ)

第二 森林申合組合ヲ設ケ伐採後植栽セサルモノハ其地ニ苗木ヲ
 組合ヨリ植栽スル等ノ規則ヲ設ケサルヘカラス

第三 燒畑ノ制限ヲ定メ山岳傾斜ノ急ナル所及ヒ山頂ニ燒畑ヲ設
 クルヲ禁セサルヘカラス

第四 林學者ヲシテ時々巡視セシメテ造林伐採等森林ノ取扱ヲ講
 話セシメサルヘカラス此ノ林學者ハ兼テ苗圃ノ監督タラシメサ
 ルヘカラス

第五 人民ヲシテ運材法ニ熟練セシメサルヘカラス(木曾ヨリ其教
 師ヲ雇フモ宜シ又名栗ノ者ニテモ可ナランカ)

第六 建築修飾等ノ用材トナル各樹種(假令ハ鹽地川胡桃等)ヲ製炭
 スルコトヲ禁セサルヘカラス

第七 製炭業並ニ木炭ノ荷造ノ改良ヲ獎勵セサルヘカラス

第八 野火ノ取締ヲ嚴ニセサルヘカラス

第九 盜伐其他林害ノ取締ヲ嚴ニセサルヘカラス

以上ノ事ヲ行フニハ森林事務ニ經檢アルモノニ依頼シテ民情習慣
 ヲ取調ヘシメ以テ嚴重ノ法則ヲ立テ能ク之ヲ實行セハ水源或ハ枯
 涸ヲ免ル、ヲ得ン

林學士 臼井永次郎 識

明治二十七年三月二十五日印刷
明治二十七年三月二十七日發行

埼玉縣內務部

埼玉縣北足立郡浦和町六十五番地

印刷者 石川 四方 介

同縣同郡同町百七十三番地

印刷所 埼玉活版所

10/20

林學士 臼井永次郎 識

明治二十七年三月二十五日印刷

明治二十七年三月二十七日發行

埼玉縣內務部

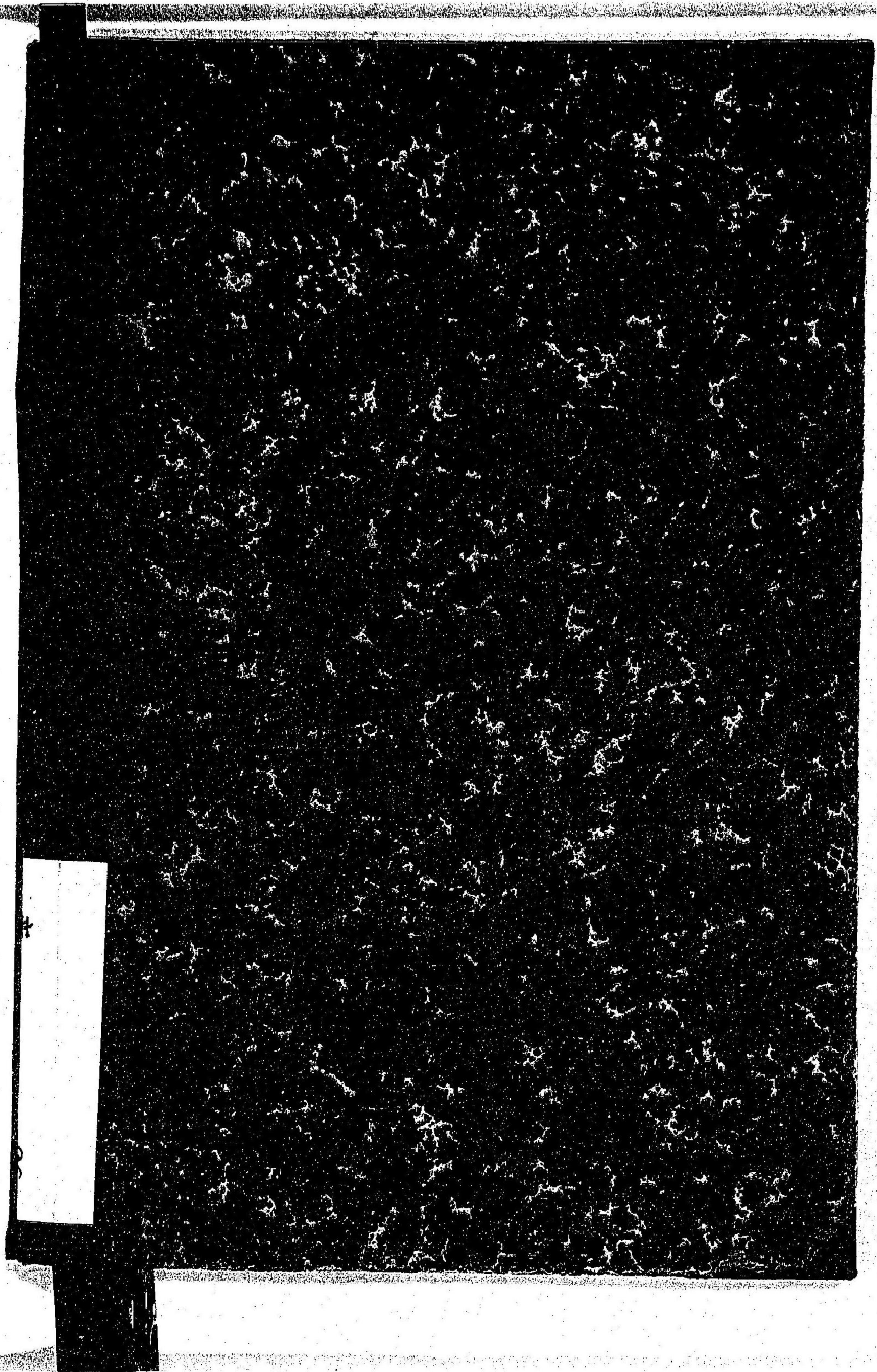
埼玉縣北足立郡浦和町六十五番地

印刷者 石川 四方 介

同縣同郡同町百七十三番地

印刷所 埼玉活版所

卷
96



Small white rectangular label with faint, illegible markings.